

第59回 日本臨床細胞学会秋期大会

テーマ
「細胞診の真価と進化」

[現地開催] 11月21日(土)~22日(日) 会場:パシフィコ横浜 ノース

[Web開催] 12月11日(金)~27日(日) 17日間

会長インタビュー

伊藤 仁 会長 (東海大学医学部付属病院 診療技術部次長・病理検査技術科長) に聞く

感染対策講じ現地開催、ウェブ併設も
細胞検査士が初の大会長

伊藤氏

第59回日本臨床細胞学会秋期大会は、11月21~22日の2日間の現地開催(横浜市)と、12月11~27日のウェブ配信(オンデマンド配信)を組み合わせたハイブリッド方式で開かれる。春期大会を合わせると通算120回目となる学術集会は、細胞検査士が初めて会長を務め、臨床検査技師にとっても記念すべき大会となる。大会長を務める伊藤仁氏(東海大学医学部付属病院 診療技術部次長・病理検査技術科長)に開催への思いや企画内容のポイントなどを聞いた。

——新型コロナウイルスの感染拡大でさまざまな学会が延期や開催方式の変更を余儀なくされています。まずは第59回大会の開催方式について教えてください。

伊藤氏 現地開催では懇親会を除きこれまで通り講演やシンポジウムを行います。現地参加できない演者には、音声付きのスライドで参加していただく予定です。その模様をビデオ収録して編集し、12月11日からウェブで配信します。一般演題(ポスターセッション)は、現地発表されない演題を含めて全てウェブで閲覧できるようにします。

座長を交えた現地でのポスターセッションは「密」を回避するため断念しましたが、それぞれの発表者にポスター前にいてもらい、参加者とディスカッションできる時間を確保します。

ウェブでの開催は、参加者が受け身になりがちで、講義を聞くような用途には向いています。しかし通信技術の制約もあって、ライブで円滑なディスカッションすることはなかなか難しいと思います。新型コロナ感染のためどうしても現地参加できない遠方の会員もいますので、細胞検査士の資格更新単位の取得機会を提供する意味もあってウェブ開催もしますが、ディスカッションを重視すべき学会はやはり現地開催が本来でしょう。新型コロナのために現地参加できない会員がいる状況は大変残念です。

一方でウェブ開催には、気軽に参加できるというメリットもあります。

講演を聞いて勉強したい人にはウェブが良く、学会発表する人には現地開催が良いのではないのでしょうか。目まぐるしく変化するコロナ禍の社会状況において、財政的、技術的な面など最後まで悩みましたが、ギリギリまで慎重に検討を重ね、最終的には両方を組み合わせた開催としました。

——臨床検査技師として初の大会長となります。どのように感じられていますか。

伊藤氏 日本臨床細胞学会において臨床検査技師は以前、正会員になれず学会運営から一歩距離を置いていましたが、公益社団法人になる際、変更されました。しかし今も準会員が多く、臨床検査技師の学会員全約8000人のうち正会員は1000人程度と少ないのが現状です。その状況を反映し理事39人のうち臨床検査技師は3人しかいません。

臨床検査技師(細胞検査士)が大会長を務めることはいわば悲願でした。2015年度に細胞検査士会長になったときから細胞検査士の社会的な地位の向上につなげたいと思い、いつか大会長を務めたいと考えてきました。

細胞検査士はその役割の重さに比べ社会の中での認知度は高いとはいえません。がん診断に近いところにいる技術者として社会的な認知を高めるためにはまずは学会内での地位向上が必要です。細胞検査士として初の大会長にはそんな意義や思いを込めた、良い内容の学術集会にしたと思っています。

——大会のテーマは「細胞診の真価と進化」です。どんな意味を込めましたか。

伊藤氏 顕微鏡で細胞を見てスクリーニングをするという従来からの細胞診の重要性は今もなら変わりません。その一方でゲノム医療の進展に伴い、セルブロック法が脚光を浴びるなど、遺伝子検査における細胞材料の有用性が注目されています。LBC(Liquid-based-cytology)が今後普及すれば遺伝子検査に活用されていくでしょう。細胞診の従来からの真の価値はこれからも重要である一方、今後のゲノム医療の進展とともにさらに進化していく、その両方の融合を表すフレーズをテーマにしました。

企画内容を検討するプログラム委員会にテーマに込めた思いを説明し、それをベースにプログラムを組んでいただきました。特別講演や招請講演ではゲノム医療を取り上げていただきます。

——学術集会長として特に臨床検査技師にお薦めの企画はなんでしょうか。

伊藤氏 「エキスパートによる細胞診学び直しプログラム」です。甲状腺や婦人科、呼吸器など全12の領域ごとにエキスパートである細胞検査士が基礎から最新の知見までを講義します。同じ現地の会場で2日間にわたって行いますので、ずっと聞いていただければ全部位を一通り、基礎から確認できる機会になると思います。

細胞検査士の資格取得時には全領域を勉強しますが、実際の業務では特定の領域しか見ないという方も少なくありません。大規模病院であっ

ても全ての領域の細胞診を日常的に扱うことはなく、普段の業務では見ない領域についても勉強したいという要望が寄せられています。そうした声に応える企画になると思います。

さらに、恒例の国際(アジア)フォーラムの他、日台韓の細胞検査士で定期的開催しているジョイントミーティングを参考に、「International Slide Conference」も企画しました。残念ながら海外からの参加はかきませんが、初の海外とのライブでのディスカッションを計画しております。具体的な症例のスライドを見つ出題者や参加者とディスカッションする機会にしてほしいと期待しています。

——大会開催に向けて臨床検査技師にメッセージをお願いします。

伊藤氏 新型コロナの感染状況は見通せませんが、学会の本来の意義に照らして必ず現地で開催したいと思い、開催の準備を進めています(取材は10月2日)。現地に来られない方のためにウェブ開催を併設しますが、感染対策をしっかりとやり、何とか現地開催を実現させたいと願っています。

医療人は、感染拡大を防ぎ、何よりも自分が感染しないことが基本です。その意味で現地開催には慎重な意見もありますが、しっかりとした感染対策を講じ一つの手本として学会を開くこともまた、医療人の役目でしょう。できる限りの感染対策を行った上で細胞検査士の皆さんにも現地参加を検討していただきたいと思っています。